

政治的保守主義の概念化と説明理論の提示

—米国共和党の保守化を手掛かりに—

西川 賢

要旨：本論文においては、第一に、政治的保守主義に関する有意な経験的実証研究を行うために、客観的に正当な根拠があると考えうる基準において、政治的保守主義を概念化することを試みる。第二に、先行研究を検討することでアメリカの共和党の保守化を対象にして、政治的保守化という現象の説明可能な三つの競合する理論を提示する。(1) 政治的活動家に関する理論：これは共和党の保守化を保守主義の理念を媒介する政治的活動家の活動とそれを媒介する政治制度から説明する。(2) 決定的選挙と政党再編に関する理論：この理論によれば共和党の保守化は決定的選挙とそれに伴う再編を通じて生じたものとして説明できる。(3) イシュー・エヴォリューション：これは共和党の保守化を個々の争点領域におけるイシュー・エヴォリューションが長期間にわたって重疊的に蓄積されて生じたものとして説明する。

1. はじめに

イデオロギー的信念体系としての政治的保守主義には多岐にわたる要素が数多く含まれており、社会科学的に有意な概念化／一般化が困難であるために、政治的保守主義に関する研究は困難であるとの指摘が存在する。

本論文においては、まず政治的保守主義に関する有意な経験的実証研究を行うために、客観的に正当な根拠があると考えうる基準において、政治的保守主義を概念化することを試みる。次に、先行研究を検討することでアメリカの共和党の保守化を対象にして、政治的保守化という現象の説明可能な三つの競合する理論を提示する。第一のものは政治的活動家に関する理論であり、これは共和党の保守化を保守主義の理念を媒介する政治的活動家の活動とそれを媒介する政治制度から説明する。第二のものは決定的選挙に関する理論であり、この理論によれば共和党の保守化は決定的選挙とそれに伴う再編を通じて生じたものとして説明可能である。第三のものはイシュー・エヴォリューション

ンであり、これは共和党の保守化を個々の争点領域におけるイシュー・エヴォリューションが長期間にわたって重疊的に蓄積されて生じたものとして説明する。

2. 政治的保守主義の概念化

サルトリーが指摘するように、政治学は数多くの概念 (Concepts) で溢れかえっており、それらに関する定義／再定義が繰り返され続けている (Sartori 2009: 14)。そのような概念の中でも、政治的保守主義はとりわけ論争的な概念 (Contested Concept) の一つといえるのではないだろうか (Adcock and Collier 2001: 532)。

ジョン・ジョストによれば (政治的) 保守主義には、①変化への抵抗：既存の秩序を保全し、それをあらゆる変化から守ろうとする気質／傾向、②社会的不平等の当然視：社会におけるヒエラルキーを不可避のものとする精神的態度、という二つの核があるという (Jost, Glaser, Kruglanski, and Sulloway 2003: 342)。野田裕久も「自国のある広く承認されている政治文化や、ある確立されている政治体制を、まさにそれら

が承認され確立されているという事実の故に、尊重し擁護し堅持しようとする志向」を政治的保守主義の概念規定としている（野田 2010：ii）。実際、イデオロギー的信念体系としての保守主義には多岐にわたる要素が数多く含まれているがゆえに、それを社会科学の方法で探求することは困難であるともいわれる（Jost et al. 2003: 343）。また、保守主義は特定の地域に固有のコンテキストと分かち難く結びついており、「保守すべき」内容は国ごとにその内容が異なるばかりではなく、一つの国の中でも雑多な政治的主張を内包する。従って保守主義の定義自体もパロキアルなものとならざるを得ないし、またそれら雑多な政治的主張を一つの統一のイデオロギーとして結びつける内在的論理も存在しない。それどころか時として個々の政治的主張同士が相矛盾する主張であるにも拘わらず、現実としてそれらの主張群は人々の態度において同時に存在する（飯田 2011: 1-2）。このようなことが原因となって、社会科学的に有意な概念化／一般化を阻んでいることも保守主義の研究を困難なものとする一因であるとの指摘も存在する（Muller 2001: 2624-2628）。

政治的保守主義の意味や価値を哲学的に問う作業は可能であっても、ギャリー・ゴーツが指摘するように、そのような作業では政治的保守主義という概念を名目的・恣意的に定義づけることしかできない（Goertz 2005: 3）。政治的保守主義に関する有意な経験的実証研究を行うためには、客観的に正当な根拠があると考えうる基準において、政治的保守主義を概念化する必要がある（Goertz 2005: 27）。

そこで本論文が目指すのが、実際に現代アメリカ政治において生じているイデオロギー的分極化（Polarization）という現象である。分極化については、アメリカの二大政党における政党内部でのイデオロギー的凝集性の拡大と、それに伴う政党間におけるイデオロギー的距離の拡大というものが最大公約数的定義とされている（松本 2009: 192）。かつては民主党、共和党

とともに党内に穏健派を抱えており、イデオロギー的に多様な集団であった（Levendusky 2009: 2）。だが、いまやアメリカの二大政党はともにイデオロギー的純化を進めて異なった政党になっており、両党から穏健派が姿を消すことによってアメリカ政治から中道が失われて激しい党派対立と分断がもたらされ、政治的停滞の一因をなしているとも指摘される（Hakcer and Pierson 2005: 223-248; Stonecash, Bremer, and Mariani 2003: 7; 待鳥 2008: 76）。つまり、ここで二大政党がイデオロギー的に分極化しているとは、民主党がよりリベラルになり、反対に共和党がより保守化していることを意味しているのである（McCarty 2007: 223-248; Layman and Carsey 2002: 786-802）。

以上のように、現実には共和党が保守化するという現象が生じている。無論、共和党が保守化しているといっても、保守化の意味するところは一義的なものではない。しかし、現実には生じている共和党の保守化をみると、大別して財政面で小さな政府を志向する経済的保守化という側面と、キリスト教に立脚した伝統的価値観を重んじる社会的・文化的保守化という二つのベクトルが存在するものと考えられる（待鳥 2009: 82）。

第一に、経済的保守化とはどのようなものか。1930年代に民主党のフランクリン・ローズヴェルト（Franklin D. Roosevelt）がニューディール政策を実施して以降、その背後に存在したリベラリズムが自明の公共哲学としてアメリカ国民に受け入れられてきた（「リベラル・コンセンサス」）。この考え方の背後には、(1) 連邦政府に権限を集中させ、それにより資本主義の失敗を是正し経済成長と完全雇用を維持するため政府が社会経済領域に介入する、(2) 連邦政府はマイノリティ集団に社会的対抗力を持たせるために権限を行使し、社会の進歩から取り残されてきた集団に多元主義を拡張し、それらの集団を国民経済とアメリカ社会へ統合するという原則が存在した（吉野 2009: 4; Baer 2000: 12）。こ

のような原則は具体的には連邦政府による積極的な財政政策・金融政策（その結果として増税や赤字国債発行も是認する）による有効需要の調整、農業への政府補助、労働組織の権利の擁護、社会保障制度の創出、人種や性差に基づく差別の禁止といった政策を生み出すことに繋がってきた（いわゆる「大きな政府」）。

経済的な意味での保守化とは、このようなりベラル・コンセンサスとその帰結としてもたらされる政策を否定し、いわゆる「小さな政府」を志向する政治的变化を指す。具体的には均衡財政、減税と財政赤字の削減、政府による各種補助金の打ち切り、社会保障制度や国民保険制度の縮小・廃止、労働組合や少数集団への保護・優遇の見直しなど、政府による社会経済領域への介入の一切を否定する政策を目指すものである。

第二に、社会的・文化的保守化とはどのようなものか。アメリカには家族、個人主義、あるいはキリスト教に由来する信仰心などの伝統的価値や社会秩序が存在する。社会的・文化的な意味での保守化とは、現実の政治や社会のあり方がこれら伝統的価値や秩序から逸脱していると判断した場合、現状を変革することを志向する政治的变化を指す（Best and Radcliffe 2005: 418-419）。具体的には人工妊娠中絶や同性愛への反対、銃規制に対する反対、進化論の学校での教授など公教育における宗教の位置づけと役割の見直し、犯罪対策、ポルノグラフィの規制などを目指すものである。

以上から、政党、すなわち多様な社会的対立を集約し、代表する機能を有するアクターが保守的なイシュー・ポジションにコミットする現象を政治的保守化と定義する。しかし、では政治的保守化はなぜ、そしてどのようにして発生するのであろうか。次節においては、先行研究を検討し、アメリカの共和党を対象にして、政治的保守化という現象を説明可能な複数の理論を提示する。

3. 先行研究の検討と説明理論の提起

3.1 理論1：政治的活動家による共和党保守化の説明

アラン・ブリנקリーが歴史学の分野におけるアメリカ保守主義の研究に関するレビューで述べたように、保守主義の研究は「孤児」(Orphan)であり、現実的要請に比して保守主義に関する研究の蓄積はかなり長い間にわたって希薄であった（Brinkley 1999: 409）。

研究史上の転機となったのは、1976年に出版されたジョージ・ナッシュによる『1945年以降の保守の知的伝統』と題する著作である（Nash 1976）。ナッシュは同書においてコンセンサス史学（例えばリチャード・ホフスタッター）によるアメリカの保守主義には真摯な知的営為と呼びうるものが存在していないとする見解に反論し、アメリカの保守主義の中にもリバタリアニズムや伝統主義（Traditionalism）、反共主義といった系譜の異なる知的営為が存在してきたと主張した（Nash 1976）。

このうち、リバタリアニズムが個人の自由や所有権の不可侵性、あるいは自由放任主義を絶対視しているのに対して、伝統主義者は社会における伝統的秩序や規範、ないし習慣の尊重を至上のものとした。しかし、これらの異なる保守思想は互いに論争を繰り返し、これら保守勢力とそれらの人々が提唱する理念が1950年代の共和党内部に深く浸透するということはなかった（Critchlow 2007: 13-21）。転換点となったのは1955年の『ナショナル・レビュー』の創刊であり、これは断片的で対立的であった保守主義を融合し包摂的なものにするフォーラムの効果を持ち、多様な思考を有する保守の最大公約数として「反リベラリズム」を掲げた。この「融合主義」(Fusionism)と呼ばれる動きは保守主義を共和党内部で力のある政治運動体へとまとめあげようとする新たな思想的契機ともなるとされる（Critchlow 2007: 22-40）。

以上のようなナッシュによって提示された戦後のアメリカ保守主義を理解するための図式はその後の多くの研究においても踏襲されている(Philips-Fein 2011: 729-730)。それらの研究においては、現実の政治や政策の背後には何らかの思想や理念が存在しており、それが現実政治のダイナミックな展開を支え、政治における運動としての実践を促進していくと考えられている。

確かに、米国の保守思想家がいかにして独自の保守的レトリックを形成してきたかを実証的に明らかにすることは、米国における政治的現実をめぐる言説の変容を考えるにあたって極めて示唆的である。以上のような研究は、例えば米国の保守思想家の思想を内在的に検討し、米国における保守主義の歴史や特質、或いは固有の意味・価値を明らかにしているという点で大きな学術的貢献をしているといえよう。だが、それらの研究は共和党の保守化がいかなるメカニズムによって起きるのかについて何ら論理的な説明を提供するものではない。

そこで、近年の保守研究の中には保守の思想とグラスルーツ・レベルで活動する保守の政治的活動家(Political Activists)との接点に注目し、思想と運動を媒介する制度的コンテキストや保守による政治的インフラストラクチャーの構築に焦点をあてるものが多く、豊富な実証研究が蓄積されている(Andrew 1997; Diamond 1995; Schneider 1999; Schoenwald 2001; Bjerre-Poulsen 2002)。

ここで政治的活動家とは単なる投票行動を超えて、戸別訪問などの形で選挙運動に関わることで政党活動や選挙結果に影響を及ぼすようなアクターを指す(Stone 2010: 286)。例えば、運動員や大統領選挙などで候補者指名を行う際に代議員として活動する人々、あるいはシンクタンクや財団、メディア、大学・研究機関、政治家訓練組織などもこれに含まれるであろう。これら活動家は新しい争点や政策が浮上してくるとそれらに敏感に反応し、イデオロギー的に

明確な立場を打ち出すことが多い(松本 2009: 112)。

特に予備選挙が制度的に確立しているアメリカの場合、予備選挙に積極的に参加しようとする政治的活動家はイデオロギー的に明確かつ極端な立場をとる者が多く、中道的な立場をとる政党/候補者よりもイデオロギー的に明確かつ極端な立場をとる候補者を支持する傾向が強いとされる(Sanbonmatsu 2004: 112)。さらに予備選挙においては特定の候補者支援を狙って政治的活動家が展開する世論誘導や資金投入といった活動がより大きな効果をあげやすく、それら活動家の影響力が反映されやすい条件が存在する(久保 2008: 240-245)。かくして、予備選挙を経た場合はイデオロギー的に極端な主張を掲げる候補者が党の公認候補になる可能性が高まる(Gerber and Morton 1998; Hirano, Snyder, Ansolabehere, and Hansen 2010; Brady, Han, and Pope 2007; Abramowitz 2008; Aldrich and Grynaviski 2010)。

ここから導かれる説明は、共和党の保守化は保守主義の理念を媒介する政治的活動家の活動が予備選挙という制度を通じてボトムアップで伝達された結果生じたものということになる。

3.2 理論2: 決定的選挙による共和党保守化の説明

ジョン・オルドリッチなどは1964年に世論形成や投票行動の面でそれまでのパターンを逸脱する画期的な変化が生じたことを指摘し、1964年から1972年にかけての時期をアメリカ政治が大きく変化を遂げた時期(Critical Era)であると結論している(Aldrich 1995: 260-264; Aldrich 1999: 9-31; Campbell 2007; Levendusky 2009)。

これに対して、アラン・アブラモウィッツやマイケル・メファートなどは、共和党の保守化は共和党の優位が確立した時代、すなわちロナルド・レーガン政権を分水嶺として生じたと主張している(Davidson 1990; Edsall and Edsall

1991)。メファートは1980年と1984年の選挙を境界として、ニューディール期以降では最大となる二大政党間での政党支持バランス(マクロ・パーティザンシップ)の変化が起きたことを実証している(Meffert, Norpoth, and Ruhl 2001: 953-954)⁽¹⁾。さらに、アブラモウィッツたちは大幅減税や福祉支出削減、あるいは国防費の増額といった非常に保守的なイデオロギーを掲げたレーガンが大統領に当選したことがきっかけとなって、共和党の保守的凝集性が高まったと分析する。共和党は保守的な有権者、政治家、運動家を引きつけて保守的拳党態勢を築き上げるとともに、共和党内部の穏健派集団は民主党に鞍替えするか、引退を余儀なくされた。かくして1980年代以降、共和党は保守的純化を進め、これが米国の二大政党におけるイデオロギー的分極化の傾向を顕著にしたとアブラモウィッツたちは述べる(Abramowitz and Saunders 1998: 636-637)。さらに、この時期にはマクロ・パーティザンシップの変化以外にも南部において共和党支持率が民主党のそれを初めて上回り南北戦争以降の民主党のソリッド・サウスが崩壊するなど、南部再編という大きな変化に見舞われていたことも事実である(Black and Black 2002: 205-240)。

しかし、1964年、或いは1980年・1984年という特定の一時期に何らかの大きな変化が生じたことは確かであるとしても、多くの政策的イシューを含む経済的な保守化と社会的・文化的な保守化が1980年、あるいは1984年という極めて短期間に共和党において一気に生じたとは想定しにくい。

最も古典的な政党再編に関する議論において、V. O. キーは有権者における既存の投票パターンがある時点を境として一気に変化するような選挙を決定的選挙と呼んだ。決定的選挙はそれ以前に特定のブロックごとに分かれた有権者が連合することで組み上げていた政党支持の安定的パターンを変化させ、新しい政党支持の持続的パターンを形成する。このように、決定的

選挙はいわゆる再編現象の呼び水となり、決定的選挙の結果、新たな多数党の出現と極めて広範な領域に及ぶ政策目標の変化を伴うと考えられてきた(Silbey 2010: 98)。キーはまた、決定的選挙は恐慌などの大きなインパクトを有するイベントや有権者感情に深く訴えるイシューの登場によって生じるとも述べていた(Key, Jr. 1955: 3-18)。また、ウォルター・ディーン・バーナムは米国における政治史の流れを再編の発生をもって区分し、特定の再編から次の再編までの時代を独自の党派の特徴をもつ政党制とそのサイクルとみなし、これをそのまま政治史上の時代区分と同義にみてる視点を提供した(Burnham 1970: 1-14)。この理論枠組みに従えば、共和党の保守化は数十年に一度発生すると考えられる再編に伴って変化したものと考えられる。

だが、多くの論者が指摘するように決定的選挙は政治的变化を理解する枠組みとしては単純明快で理解しやすいが、同時に経験的証拠が非常に乏しいという指摘もある(Ladd 1991; Mayhew 2002; Rosenof 2003; Ware 2006; Karol 2009)。かつては確かに1896年選挙や1932年選挙のように、決定的選挙の事例に該当すると考えられる選挙もあったが、それ以降の時代において決定的選挙に擬するべき変化は起きていない。したがって1964年、あるいは1980年の選挙を決定的選挙とみなし、多くの政策的イシューを含む経済的保守化と社会的・文化的保守化が全てただ一点において急激に生じたと考えることは極めて困難である。むしろ、共和党の保守化は長い時間をかけて徐々に進行してきたものと考えべきではないだろうか。

この点に関して、V. O. キー自身や他の論者が決定的選挙のような短期的かつ急激な変化とは別個に、複数の選挙にまたがって持続的に発生する永続的再編(Secular Realignment)の概念を提起している(Key, Jr. 1959: 198-210; Campbell 2006: 360-362; Sundquist 1983: 11-12)⁽²⁾。しかし永続的再編については、それが発生するメ

カニズムや帰結についての具体的説明が欠如しており、ただ「変化は長期的に起こる」とする一般的な立場を表明しているにすぎない⁽³⁾。

いずれにせよ、ここから導かれる説明は共和党の保守化は何らかの原因によって決定的選挙が起こり、それに伴う再編を通じて生じたというものである。

3.3 理論3：イシュー・エヴォリューションによる共和党保守化の説明

サンドクウィストやサンボンマツがいうように、新たな論争的イシューがアジェンダとして浮上すると、政党／候補者は通常はそれらのイシューが既存の政党支持パターンを損なわぬよう、それらのイシューに対して利害や関心を有する自党有権者を極力刺激しないよう慎重な立場を取ろうとする。ところが、政党／候補者のこれらのイシューに対する対応次第では、決定的選挙のような大規模かつ急激な変化ではないにせよ、既存の政党支持パターンに部分的な亀裂が生じることがある(Sanbonmatsu 2004: 43)。ジョン・ザラーは政治家、政府高官など、政治的エリートは一般有権者が政治に関する情報を得る際に直接的・間接的な手掛かり(Cue)となっていると主張している(Zaller 1992: 6-9)。同じくキラ・サンボンマツも大統領／大統領候補が提起する新しい政治的レトリックやイシュー・ポジションは党を代表する見解とみられがちであり、一般有権者が政党のイメージに関するマス・オピニオンを形成するにあたって非常に有力な手掛かりを提供していると述べている(Sanbonmatsu 2004: 114; Levendusky 2009: 16)。ゆえに、政治的エリートがどのように新規の論争的イシューに対応するかを手掛かりとして、一般有権者はそれに追従することで新たなマス・オピニオンを形成し、既存の政党支持パターンに大きな変化が生じるとする立場をとるものは多い(Levendusky 2009: 7)。これが「イシュー・エヴォリューション」(Issue Evolution)と呼ばれる現象である。

イシュー・エヴォリューションが発生するメカニズムは以下のように示されている(Stimson 2004: 64-68; Carmines and Stimson 1989: 160-161; Adams 1997: 718-737; Layman 2001: 23-40)。

- 1：社会に存在する宗教やエスニシティ、地域対立、言語対立などの構造的亀裂(Structural Cleavages)は社会的対立の源となり、それが多くの政治的イシューを生み出す。
- 2：それら政治的イシューの多くは誰の注目も集めないまま消えてしまうが、中には長期にわたって注目を集め続け、国民の間に広く論争を喚起すると同時に既存の政党支持のパターンに亀裂を入れるような形で存在する永続的イシューがある。
- 3：イシュー・エヴォリューションが発生するには、そのきっかけとなる「決定的瞬間」(Critical Moment)が必要とされる。決定的瞬間において、政治的エリートは永続的イシューを取り上げ、そのイシューに対してそれまでとは異なるスタンスを明確に打ち出す。この問題に関して、イシュー・エヴォリューションに関する既存研究で注目されているのは少数党の地位にある政党のケースである(Layman 2001: 38; Carmines and Stimson 1989: 6-7; Riker 1982: chapter 6)。すなわち、多数党の政治的エリートには既存の政党支持パターンとスタンスを維持しようとする現状維持の志向が強く働くが、少数党の政治的エリートには多数党の支持連合を分裂させ得るようなイシューを敢えて取り上げ、選挙戦略を刷新する志向が高まる。少数党が戦略を変更すれば有権者に伝わる党のイメージが刷新され、場合によっては有権者の政党支持パターンに長期的に変化が生じて多数党化することも可能だからである。このように、少数党に甘んじている政党の政治的エリー

トが論争的なイシューに関して明確な立場をとることは多数党の分裂 (“c-racks in the opposition”) を促す可能性を秘めており、場合によっては少数党にとっての「起死回生」の選挙戦術ともなりうる (Reiter and Stonecash 2011: 15-17; Jeong, Miller, Schofield, and Sened 2011: 511-525)。

この点に関して、ヒリガスとシールズも、なぜ既存の政党支持のパターンに亀裂を生じさせるような極端なイシュー (Wedge Issue; 「分裂的イシュー」) をあえて公約に掲げる場合があるのかという問題に挑んでいる。彼女らの説では各党の支持層には、あるイシューについて自党の見解を支持しない「説得可能な支持者」 (Persuadable Voters) が存在するとする。これらの有権者は自党候補者のイシュー・ポジション次第では他党へとスイングする可能性が高い。ゆえに、少数党の政治的エリートがあえて分裂的イシューを選挙公約や綱領に掲げるのは、多数党の支持連合に亀裂を生じさせることで説得可能な支持者を自党に惹きつけて勝利する戦略をとろうとするからである。すでに多数党の地位にある政党の場合、その政党／候補者はより現状維持的なポジションを取ろうとするであろう (Hillygus and Shields 2008: 2-3)。

スティムソンらはバリー・ゴールドウォーターが1964年公民権法に反対したこと、ロナルド・レーガンが1980年の共和党の党綱領から共和党が長年支持してきた女性平等権 (Equal Right) に関する支持を削除したこと、クリントンが1992年に史上初めて同性愛者の軍入隊を許可する公約を掲げたことを決定的瞬間の実例として挙げている。

- 4 : 決定的瞬間をきっかけとして、二大政党内部において政治家、政府高官、政治的活動家といった政治的エリートがそのイ

シューに対する賛成派、反対派、中間派に分かれていく。やがてイシューに関する賛成派、反対派のいずれかが党内で多数派を形成し、党の新たな核となる。

- 5 : 以上の一連の動きを手掛かりとして一般有権者も新たなマス・オピニオンを形成し、既存の政党支持パターンに変化が生じ、新しい政党支持パターンが出現する。このような変化に伴って政党のイデオロギー的性格も変化していき、政党システムの変動につながっていく。

カーマインスたちが典型的実証例として取り上げたのは、黒人公民権に関する問題である (Carmines and Stimson 1989; Stimson 2004)。

南北戦争後、公民権問題に関しては南部に支持基盤を持つ民主党よりも共和党の方がより積極的に公民権を擁護する姿勢をとり、民主党は再建期の共和党による南部再建策および黒人に対する反発から共和党を排除して強力な民主党一党支配体制を南部に築き上げ、人種隔離政策を推進した。だが、ニューディール期以降は徐々に北部を中心に民主党支持に転じる黒人が出始め、1948年の民主党全国党大会で南部が主張する州権条項が党綱領に盛り込まれず、逆に公民権支持の条項が規定されると、南部代議団が党大会を退場して民主党を離脱して州権民主党を結成し、徐々に民主党は公民権の問題に関しては従来までの保守的な姿勢を変化させつつあった。これに対して、1950年代まで共和党は公民権に対して積極的に支持する姿勢を維持していたが、画期的転機となったのは共和党が1964年の大統領選挙で公民権法に反対票を投じた6人の共和党上院議員の一人であるバリー・ゴールドウォーターを大統領候補に指名したことであった。これを機に人種に関するそれまでの共和党のイシュー・ポジションは一変し、共和党が人種的イシューに関して保守的スタンスに立ち、民主党がリベラルなスタンスに立つ党に分極化するという転換が生じた。ゴールドウォーターは惨敗を喫したものの、これを転機として

共和党内部における政治的エリートに引き続き、政治的活動家レベルでも人種の保守派が多数派を形成することにつながり、一般有権者が新たなマス・オピニオンを形成する手掛かりを提供した。これは南北戦争以来民主党の強固な支持基盤であった南部の保守的な白人票を共和党支持に振り向ける契機ともなり、既存の政党支持パターンに変化を生じさせ、新しい政党支持パターンが出現するきっかけを提供したといえる。

以上の人種イシュー以外にも、アダムスが人工妊娠中絶、リンダマンとハイダー＝マーケルが銃規制と環境問題、レイマンが宗教的・文化的イシューについて追加的実証を行ってイシュー・エヴォリューションの実例を豊富化している (Adams 1997: 718-737; Layman 2001; Lindman and Haider-Markel 2002) ⁽⁴⁾。

ここから導かれる説明は、共和党の保守化とは以上のようなメカニズムに基づいて生じた個々の争点領域におけるイシュー・エヴォリューションが長期間にわたって重疊的に蓄積されて生じたものであるというものである (Karol 2009: 184)。

ただし、この説明については直感的に疑問に思われる点もある。それは、共和党の保守化とは単に個々の争点領域におけるイシュー・エヴォリューションが長期間にわたって重疊的に蓄積されたものにすぎないのであろうか。仮にこの仮説が正しいとしても、変化は多様な領域で長期間にまたがって個別に起きる、つまり変化は複雑で多様なものであると述べたに過ぎないのではないか。また、一つの争点領域において発生したイシュー・エヴォリューション (例えば人種問題) はそれがいかに大きなインパクトを持つものであったとしても、そのみをもって包括的な共和党の「保守化」が起こったと考えるのは過度の一般化ではないだろうか (Carmines and Wagner 2006: 67-81)。

4. 結論

以上、本論文においては政治的保守主義に関する概念化を試み、その後、政治的保守化という現象を説明可能な三つの競合する理論を提示した。今後の展望として、共和党の保守化に関する複数の競合的説明の妥当性を検証するために、適切なメソドロジーのもとに事例を選択し、説明の優劣を検証する具体的な実証的作業を行わねばならない。紙幅の都合もあるので、方法論の提示や事例研究などの作業は別稿に委ねたい。

〔謝辞〕 本論文は2011年度日本政治学会で報告した論文に加筆したものである。コメントをくださった佐藤一進先生、松本俊太先生、ならびに司会をお務めくださった待鳥聡史先生、共同発表者であった石生義人先生、飯田健先生、そしてフロアの先生方に深く感謝申し上げる次第である。

- (1) マクロ・パーティザンシップは成年人口における民主党支持者の割合を共和党支持者と民主党支持者の合計で割ったものである (Green, Palmquist, and Schickler 2002: 88)。
- (2) ただし、概念の操作化等に工夫を加えれば決定的選挙による分析は有効であると主張する向きもある (Nardulli 1995: 10-22; Weatherford 2002: 221-257)。
- (3) ストーンキャッシュとエリーナは1896年の政党再編を再検討し、1896年の再編が比較的長期に渡って進行していたと論じている。変化が長期にわたる理由として、長期的社会経済変動を有権者が追跡し、それらの変化に見合った政党支持を獲得していくのに時間がかかるためであるとしている。ストーンキャッシュらはこの枠組みは1932年の再編にも当てはまるとし、永続的再編の概念的再検討をするべきであると主張している (Stonecash and Silina 2005: 27)。
- (4) なお、イシュー・エヴォリューションの経験的妥当性に疑義を呈する論者もいる (Abramowitz 1994; Cowden 2001)。

参考文献 (アルファベット順)

Abramowitz, Alan I. 1994. "Issue Evolution Re-

- considered: Racial Attitudes and Partisanship in the US Electorate." *American Journal of Political Science*, 38: 1-24.
- Abramowitz, Alan I, Kyle L. Saunders. 1998. "Ideological Realignment in the U.S. Electorate." *The Journal of Politics*, 60: 634-652.
- Abramowitz, Alan. 2008. "Don't Blame Primary Voters for Polarization." *The Forum*, 5: 1-11.
- Adams, Greg D. 1997. "Abortion: Evidence of an Issue Evolution." *American Journal of Political Science*, 41: 718-737.
- Adcock, Robert, David Collier. 2001. "Measurement Validity: A Shared Standard for Qualitative and Quantitative Research." *American Political Science Review*, 95: 529-564.
- Aldrich, John H. 1995. *Why Parties? The Origin and Transformation of Political Parties in America*, Chicago: The Chicago University Press.
- Aldrich, John H. 1999. "Political Parties in a Critical Era." *American Politics Research*, 27: 9-31.
- Aldrich, John H, Jeffrey D. Grynaviski. 2010. "Theories of Parties." in L. Sandy Maisel and Jeffrey M. Berry (eds.), *The Oxford Handbook of American Political Parties and Interest Groups*, New York: Oxford University Press, 21-36.
- Andrew III, John A. 1997. *The Other Side of the Sixties: Young Americans for Freedom and the Rise of Conservative Politics*, New Brunswick: Rutgers University Press.
- Baer, Kenneth. 2000. *Reinventing Democrats: The Politics of Liberalism from Regan to Clinton*, Kansas: University Press of Kansas.
- Best, Samuel J, Benjamin Radcliffe (eds.), 2005. *Polling America: An Encyclopedia of Public Opinion*, Volume 2, Connecticut: Greenwood Press.
- Bjerre-Poulsen, Niels. 2002. *Right Face: Organizing the American Conservative Movement, 1945-1965*, Copenhagen: Museum Tusulanum Press.
- Black, Earl, Merle Black. 2002. *The Rise of Southern Republicans*, Cambridge: The Belknap Press.
- Brady, David W, Harie Han, and Jeremy C. Pope. 2007. "Primary Elections and Candidate Ideology: Out of Step with the Primary Electorate." *Legislative Studies Quarterly*, 32: 79-105.
- Brinkley, Alan. 1999. "The Problem of American Conservatism." *The American Historical Review*, 99: 409-429.
- Burnham, Walter D. 1970. *Critical Elections and the Mainsprings of American Politics*, New York: Norton.
- Campbell, Andrea Louise. 2007. "Parties, Electoral Participation, and Shifting Voting Blocs." in Paul Pierson and Theda Skocpol (eds.), *The Transformation of American Politics: Activists Government and the Rise of Conservatism*, Princeton: Princeton University Press, 68-102.
- Campbell, James E. 2006. "Party systems and Realignment in the United States, 1868-2004." *Social Science History*, 30: 359-386.
- Carmines, Edward G, James A. Stimson. 1989. *Issue Evolution: Race and the Transformation of American Politics*, Princeton: Princeton University Press.
- Carmines, Edward G, Michael W. Wagner. 2006. "Political Issue and Party Alignments: Assessing the Issue Evolution Perspective." *Annual Review of Political Science*, 9: 67-81.
- Cowden, Jonathan A. 2001. "Southernization of the Nation and Nationalization of the South: Racial Conservatism, Social Welfare, and White Partisans in the United States, 1956-1992." *British Journal of Political Science*, 31: 277-301.
- Critchlow, Donald T. 2007. *The Conservative Ascendancy: How the GOP Right made Political History*, Massachusetts: Harvard University Press.
- Davidson, Chandler. 1990. *Race and Class in Texas Politics*, Princeton: Princeton University Press.
- Diamond, Sara. 1995. *Roads to Dominion: Right-Wing Movements and Political Power in the United States*, New York: The Guilford Press.
- Edsall, Thomas B, Mary D. Edsall. 1991. *Chain Reaction: The Impact of Race, Rights, and Taxes on American Politics*, New York: W. W. Norton and Company.
- Gerber, Elizabeth R, Rebecca B. Morton. 1998. "Primary Election, Systems, and Representation." *Journal of Law, Economics, and Organization*, 14: 304-324.
- Goertz, Gary. 2005. *Social Science Concepts: A User's Guide*, Princeton: Princeton University Press.
- Green, Donald P, Bradley Palmquist, and Eric Schickler. 2002. *Partisan Hearts and Minds: Political Parties and the Social Identities of Voters*, New Haven: Yale University Press.
- Hacker, Jacob S, Paul Pierson. 2005. *Off Center:*

- the Republican Revolution and the Erosion of American Democracy*, New Haven: Yale University Press.
- Hillygus, D. Sunshine, Todd G. Shields. 2008. *The Persuadable Voter: Wedge Issue in Presidential Campaigns*, Princeton: Princeton University Press.
- Hirano, Shigeo, James M. Snyder, Jr., Stephen Ansolabehere and John Mark Hansen. 2010. "Primary Election and Partisan Polarization in the U.S. Congress." *Quarterly Journal of Political Science*, 5: 169-191.
- 飯田健. 2011. 「保守主義の形成における政治的・社会的要因：日米保守主義の比較実証分析」2011年度日本政治学会研究大会報告論文.
- Jeong, Gyung-Ho, Gary J. Miller, Camilla Schofield, and Itai Sened. 2011. "Cracks in the Opposition: Immigration as a Wedge Issue for the Reagan Coalition." *American Journal of Political Science*, 55: 511-525.
- Jost, John T, Jack Glaser, Arie W. Kruglanski, and Frank J. Sulloway. 2003. "Political Conservatism as Motivated Social Cognition." *Psychological Bulletin*, 129: 339-375.
- Karol, David. 2009. *Party Position Change in American Politics: Coalition Management*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Key, Jr., V. O. 1955. "A Theory of Critical Elections." *The Journal of Politics*, 17: 3-18.
- Key, Jr., V. O. 1959. "Secular Realignment and the Party System." *The Journal of Politics*, 21: 198-210.
- 久保文明. 2008. 「アメリカの政党制—メタ政策システムとして」城山英明・大串和雄（編）『政策革新の理論』東京大学出版会, 225-245頁.
- Ladd, Everett Carl. 1991. "Like Waiting for Godot: The Uselessness of "Realignment" for Understanding Change in Contemporary American Politics." in Byron E. Shafer (ed.), *The End of Realignment? Interpreting American Electoral Eras*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 24-36.
- Layman, Geoffrey C. 2001. *The Great Divide: Religious and Cultural Conflict in American Party Politics*, New York: Columbia University Press.
- Layman, Geoffrey C, Thomas M. Carsey. 2002. "Party Polarization and "Conflict Extension" in the American Electorate." *American Journal of Political Science*, 46: 786-802.
- Levendusky, Matthew. 2009. *The Partisan Sort: How Liberals Became Democrats and Conservatives Became Republicans*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Lindman, Kara, Donald P. Haider-Markel. 2002. "Issue Evolution, Political Parties, and the Cultural Wars." *Political Research Quarterly*, 55: 91-110.
- 待鳥聡史. 2008. 「イデオロギーと統治の間で」『アステイオン』第69号, 76-98頁.
- 待鳥聡史. 2009. 『〈代表〉と〈統治〉のアメリカ政治』講談社.
- 松本俊太. 2009. 「アメリカ連邦議会における二大政党の分極化と大統領の立法活動（一）」『名城法学』第58巻・第4号, 169-196頁.
- Mayhew, David R. 2002. *Electoral Realignments: A Critique of an American Genre*, New Haven: Yale University Press.
- McCarty, Noran. 2007. "The Policy Effects of Political Polarization." in Paul Pierson and Theda Skocpol (eds.), *The Transformation of American Politics: Activists Government and the Rise of Conservatism*, Princeton: Princeton University Press, 223-255.
- Meffert, Michael F, Helmut Norpoth, and Anirudh V. S. Ruhl. 2001. "Realignment and Macropartisanship." *The American Political Science Review*, 95: 953-962.
- Muller, J. Z. 2001. "Conservatism: Historical Aspects." in Neil J. Smelser and Paul B. Baltes, (eds.), *International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences*, Amsterdam: Elsevier, 2624-2628.
- Nardulli, Peter F. 1995. "The Concept of a Critical Realignment, Electoral Behavior, and Political Change." *The American Political Science Review*, 89: 10-22.
- Nash, George H. 1976. *The Conservative Intellectual Movement in America since 1945*, Delaware: ISI Books.
- 野田裕久（編）. 2010. 『保守主義とは何か』ナカニシヤ出版.
- Philips-Fein, Kim. 2011. "Conservatism: A State of the Field." *The Journal of American History*, 98: 723-743.
- Reiter, Howard L, Jeffrey M. Stonecash. 2011. *Counter Realignment: Political Change in the Northeastern United States*, Cambridge: Cam-

- bridge University Press.
- Riker, William H. 1982. *Liberalism against Populism: A Confrontation between the Theory of Democracy and the Theory of Social Choice*, San Francisco: W. H. Freeman.
- Rosenof, Theodore. 2003. *Realignment: The Theory That Changed the Way We Think about American Politics*, Maryland: Rowman & Littlefield.
- Sanbonmatsu, Kira. 2004. *Democrats/Republicans and the Politics of Women's Place*, Michigan: The University of Michigan Press.
- Sartori, Giovanni. 2009. "Concept Misformation in Comparative Politics." in David Collier and John Gerring (eds.), *Concepts and Method in Social Science: The Tradition of Giovanni Sartori*, Oxon: Routledge, 13-43.
- Schneider, Gregory L. 1999. *Cadres for Conservatism: Young Americans for Freedom and the Rise of the Contemporary Right*, New York: NYU Press.
- Schoenwald, Jonathan M. 2001. *A Time for Choosing: The Rise of Modern American Conservatism*, New York: Oxford University Press.
- Silbey, Joel H. 2010. "American Political Parties: History, Voters, Critical Elections, and Party Systems." in L. Sandy Maisel and Jeffrey M. Berry (eds.), *The Oxford Handbook of American Political Parties and Interest Groups*, New York: Oxford University Press.
- Stimson, James A. 2004. *Tide of Consent: How Public Opinion Shapes American Politics*, New York: Cambridge University Press.
- Stone, Walter J. 2010. "Activists, Influence, and Representation in American Elections." in L. Sandy Maisel and Jeffrey M. Berry (eds.), *The Oxford Handbook of American Political Parties and Interest Groups*, New York: Oxford University Press, 285-302.
- Stonecash, Jeffrey M, Everita Silina. 2005. "The 1896 Realignment: A Reassessment." *American Politics Research*, 33: 3-32.
- Stonecash, Jeffrey M, Mark D. Bremer and Mack D. Mariani, 2002. *Diverging Parties: Social Change, Realignment, and Party Polarization*, Massachusetts: Westview Press.
- Sundquist, James L. 1983. *Dynamics of the Party System: Alignment and Realignment of Political Parties in the United States*, Washington, D.C.: Brookings Institution Press.
- Ware, Alan. 2006. *The Democratic Party heads North, 1877-1962*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Weatherford, M. Stephen. 2002. "After the Critical Election: Presidential Leadership, Competition, and the Consolidation of the New Deal Realignment." *British Journal of Political Science*, 32: 221-257.
- 吉野孝. 2009. 「背景としての政党対立」吉野孝・前嶋和弘編『二〇〇八年アメリカ大統領選挙——オバマの当選は何を意味するのか』東信堂, 3-28頁.
- Zaller, John R. 1992. *The Nature and Origins of Mass Opinion*, New York: Cambridge University Press, 1992.